

JUNKAN



循環研通信
No.52
2019 Jan.

沖縄フィールドワーク特集

一美しい国をこれ以上壊すな

今号では昨年 10 月に実施した循環研フィールドワーク「沖縄辺野古で平和をつくる環境戦略を考える」に参加したメンバーの投稿を集め、沖縄フィールドワーク特集を組ませていただきました。

このフィールドワークは「平和をつくる環境戦略」研究の一環として行ったものです。この研究は 2015 年の集団的自衛権行使に道を開く安保安法問題の検討を契機として始めました。

「美しい国」をスローガンに登場した安倍政権は一貫して「脱戦後」政策を推進してきました。第一次安倍内閣の頃から教育の中央集権化、道徳の教科化を図りました。2013 年 11 月には国家安全保障会議（日本版 NSC）を創設、同年 12 月には特定秘密保護法、2014 年 4 月には、武器輸出を原則禁じた「武器輸出三原則」に代わって「防衛装備移転三原則」を閣議決定、2017 年 6 月には「共謀罪（テロ等準備罪）」を取り締まる改正組織犯罪処罰法も成立させました。

循環研代表 久米谷 弘光



モリカケ問題等で政府機関のモラルハザードを助長し、いまやトランプリスクと相まって、日本がいつ戦争に巻き込まれてもおかしくない戦前状況が作られています。

そして、沖縄の辺野古には、日米安保・地位協定の問題とともに、日本が抱える戦争・平和、環境、人権、国対地方自治等あらゆる矛盾が表出しています。私たちは、これを見逃すことはできません。

CONTENTS

P1 沖縄フィールドワーク特集一美しい国をこれ以上壊すな

P3 沖縄のフィールドワークに参加して 一あらためて基地問題を考える一

P6 基地移設はユクシ、新基地建設だ！（ユクシは沖縄の方言でウソの意）

P7 「沖縄ほろ酔い紀行」

P8 沖縄フィールドワークに参加して

P10 環境俳句

P12 春夏秋冬

循環研代表 久米谷 弘光

循環研理事 田中宏二郎

循環研理事 山口 民雄

循環研理事 及川 陽子

循環研理事 服部 充

循環研理事 及川 陽子

風月

2018年8月、建設中の米軍辺野古基地での土砂投入を前に、これを阻止しようと翁長沖縄県知事が埋め立て承認撤回を表明した後、急逝されました。

地元の辺野古新基地建設反対運動は、日本政府・沖縄防衛局と米軍の挟み撃ちに合ういわば「沖縄戦」の様相です。大浦湾は、ジュゴンをはじめ絶滅危惧種 262 種を含む 5800 種以上の生物が確認されている生物多様性のホットスポットです。土砂投入後にはこの自然環境の回復が困難になります。また、埋め立て承認後に軟弱地盤の存在や活断層の疑いが判明したことも承認撤回の理由となっています。

翁長前知事の急逝により行われた沖縄県知事選は9月30日に投開票されました。辺野古新基地建設反対を掲げた前自由党衆院議員の玉城デニー氏が、自公が全面支援した前宜野湾市長の佐喜真淳氏を破り、初当選を果たしました。得票数は玉城氏が39万6632票だったのに対し、佐喜真氏は31万6458票。前回(14年)は翁長前知事が36万票だったことを考えると、沖縄の民意は圧倒的に辺野古新基地反対を支持したと言えます。

玉城デニー知事は、9月末の初当選後から政府との対話を求め、それは早くも10月12日に実現。首相官邸を訪れ、安倍晋三首相と面会しました。

私たちがフィールドワークで沖縄を訪れたのは、ちょうどこの頃でした。旅程は次のようなものでした。

【フィールドワークの旅程】

10月11日(木)

10:45 沖縄県庁ロビー集合→11:00～12:20 基地対策課によるレクチャー→12:30～13:00 県庁食堂で食事→13:30～14:00 嘉数高台展望台から普天間基地見学→14:30～15:00 道の駅「かでな」から嘉手納基地見学→17:00 名護市のホテルにチェックイン→18:30～21:30 夕食を取りながら現地ガイド役と懇談

10月12日(金)

8:30 ホテル出発→9:00～10:30 反対派辺野古住民金城武政さんのお話を聴く→12:00～14:00 昼食後大浦湾見学→15:00～16:00 高江ヘリパッド周辺見学→16:15 本部の美ら海水族館で解散

玉城知事は普天間飛行場の危険性除去の早期実現のため、首相が元知事に約束した2019年2月までの運用停止を「ぜひ実現してほしい」と要請しました。また、日米地位協定の改定を求める立場から、政府や米軍、沖縄県を交えた三者協議

の設置も求めましたが、政府側から明確な返答はありませんでした。一方、安倍首相は、「戦後70年以上が経ち、今なお沖縄に米軍基地が集中し、大きな負担になっている現状は是認できるものではないと考えている。今後も県民の皆様の気持ちに寄り添いながら、基地負担の実現について、1つ1つ着実に結果を出していきたい」と述べたと報じられています。

われわれが訪れた辺野古の基地工事ゲート前や高江のヘリパッドに続くゲート前は、雨の中、アルソックの警備員に守られながら、静かな時間が流れていました。

しかし、会談のわずか5日後の17日、防衛省は、沖縄県による辺野古沿岸部の埋め立て承認撤回に対する対抗措置として、行政不服審査法に基づき、国土交通大臣に対し撤回の効力停止を申し立てました。政府は2015年10月、当時の翁長知事が埋め立て承認の「取り消し」を行った際にも、同じ執行停止を申し立てました。同法は「国民の権利救済」が目的とされることから、「沖縄防衛局の「私人」へのなりすまし」「制度の乱用」などと批判を浴びた経緯があります。

そして12月14日、辺野古の海に土砂投入が強行されました。しかもその土砂は環境基準に沿うものか確認もされず、海は赤茶色に染まりました。

これが安倍首相の言う沖縄県民に「寄り添う」ことなのでしょうか？

いまトランプ政権の米国と中国は経済戦争を繰り広げています。安倍政権の防衛計画大綱や防衛力整備計画を見ると、明らかに中国を仮想敵国として防衛力増強が唱えられています。

しかし、沖縄では那覇空港と市街地をつなぐ「ゆいレール」でも、本部の美ら海水族館でも中国からの観光客があふれています。もし、中国との対立が問題ならば、その解決策は、新たな軍事基地建設や武力増強競争ではありません。対話であり平和構築に向けての協働、協創の努力です。

敵国であれ自国であれ、軍隊は市民に牙をむくということを知らしめたのが「沖縄戦」です。沖縄県民は基地と共に戦後を歩みながら、その記憶を忘れていません。私たちも忘れてはなりません。

「美しい国」と聞いて普通われわれが想像するのは、平和な自然に恵まれた国です。日本は、国連憲章と国際平和の理念を共有する平和憲法を持つ国です。沖縄の辺野古、大浦湾も美しい国の一部であるはずですが。サンゴ礁の命あふれる海を汚れた土砂で埋めようとする安倍政権には、もうこれ以上美しい国を壊すなどと言わざるを得ません。

沖縄のフィールドワークに参加して —あらためて基地問題を考える—

循環研理事 田中宏二郎

基地問題の複雑さや当事者に及ぼす深刻さについては現場から離れた所にいる者にとっては正直なところ中々本当の姿が分からない。それだけに、このたび循環研が「平和をつくる環境戦略」を考える一環として、辺野古米軍基地問題に関してのフィールドワークをした意義は大きく、現場に直接行って実感を持つよい機会となった。

沖縄の基地問題を考える上では沖縄の歴史と日本との関係を理解しておくことも重要と思い、フィールドワークの前後を利用して沖縄の琉球王朝の史跡や太平洋戦蹟等も駆け足で訪ねた。

1. 沖縄が歩んだ（歩んでいる）苦難の道

にわか仕込みで沖縄の歴史を概観してみる。沖縄では11世紀前半頃に各地で「按司（あじ）」という首長が現れ、それを統一した浦添城の舜天（しゅんてん）によって沖縄初の統一国家が誕生した。その頃から中国を始めとする東南アジアの国々との交流も盛んになり、14世紀に入ると各地の按司を束ねて三つの国が沖縄本島の北部、中部、南部にそれぞれまとまり、約100年間三山時代と呼ばれる時期が続いた。その後、三山の中から南山の尚巴志（しょうはし）が勢力を伸ばし首里に王都を構え三山を統一し、尚氏王朝が明治維新まで継続した。16世紀末に徳川幕府が中国明朝との通商を行うために薩摩藩に琉球への進攻を許可し、薩摩藩は第一尚氏王朝の後にできた第二尚氏王朝を存続させながら琉球を間接支配して琉球の貿易を監督するようになった。琉球は薩摩藩の従属国となって中国等との通商と技術の伝播を義務付けられたが、一方で清には朝貢を続けた。明治時代になって明治政府は、琉球と中国の双方からの強い抵抗があったものの軍隊を動員して琉球王朝を強制解体し、沖縄は1894年の日清戦争後に正式に

日本の領土とされた（明治政府によるこの強制併合の一連の過程は「琉球処分」と称されている）。琉球王朝は薩摩藩の従属国になって以降250年間、日本と中国の二重支配に苦しんできたが、この間独自の伝統文化を作り上げてきた。首里城蹟周辺は「琉球王朝のグスク（城）及び関連遺産群」として2000年12月に世界遺産に登録されており、これは日本としては地域に残る誇るべき文化遺産と位置付けられる。

沖縄は太平洋戦争の末期にはアメリカの日本本土進攻を遅らせる盾として悲惨な戦場となり、兵士、民間人あわせて20万人を超える多数の犠牲者を出した。後日バスで訪れた沖縄本島の南部は沖縄戦最後の激戦地となったところで、今は糸満市摩文仁（まぶた）に整備された県営都市公園となっている。ここは約40haの広大な国定公園で、園内には平和祈念堂、平和記念資料館、戦没者墓苑などが点在している。平和記念資料館では当時の戦闘の様子をビデオ映像で流しており、また戦闘現場の説明パネルや日本兵の遺品などが展示されていた。しかし見学に訪れた修学旅行生等は足早に通り返り過ぎて行くだけで、戦争の悲惨な思いはあまり伝わっていない感がした。この地は戦没者の冥福を祈り世界の恒久平和を願う場と位置付けられているが、公共交通手段がローカルバスだけの不便な状況で、訪れた日が日曜日であったにもかかわらず人影は少なかった。フィールドワークで訪れた普天間基地の近くの公園にも旧日本軍の塹壕の跡や慰霊碑などが残されていたが、そこで悲惨な戦いが展開されたとの実感は得がたかった。戦後、本土では米軍基地の整理・縮小が進んだが、沖縄はその肩代わりを強いられ、現在では国土面積の約0.6%しかない沖縄県に全国の米軍専用施設面積の約70%が集中して県民に過重な基地負

担を強いている。日本（本土）が独立した後も 27 年間米国の施政権下に置かれており本土に比べて大きな差別を受けているとの指摘もある。このように沖縄は過重な基地負担を背負っている現実があるものの、一方で海のレジャーやグルメを求めて訪れる観光客が主体の地になっているのも今の姿である。

2. 沖縄辺野古基地問題に思う

フィールドワークを通じて印象に残ったことの 1 つは、沖縄県庁のレクチャーで「沖縄には（本土からの）差別があり、基地反対闘争は今や差別反対闘争に変わってきた」との発言があったこと、また今年 9 月末に行われた沖縄県知事選挙で玉木デニー氏が勝利したことを踏まえて、「沖縄県民 1 人 1 人が意識を持ちオール沖縄が復活してきた」と述べていたことである。レクチャーの後、車で普天間基地や嘉手納基地を案内され、普天間基地の近くにある嘉数（かかず）の高台にある公園の展望台から基地を眺め、オスプレイが何基も止まっている情景が目撃された。また嘉手納基地近くに行ったときは、基地が展望できる店に立ち寄ってそこから見た基地の広大さに圧倒された。



嘉手納基地を望む

ただフィールドワークの期間中、特に飛行機やヘリコプターの離着陸の目撃や騒音はなかったの
で基地問題の深刻さはあまり実感できなかった。

辺野古新基地反対闘争の事務所を訪ねた時には、辺野古新基地建設の場となる名護市では基地建設反対派と賛成派との戦いの中で、~~政府~~政府の交付金を巡る取引があり、また名護住民と辺野古区民とに違いがあることなどの複雑な面も聞かされた。名護市にはコミュニティに様々な力が作用し多くの対立も生み住民感情も複雑なようだ。

辺野古基地問題では、『安全保障問題＝日本の基地問題＝沖縄の基地問題＝普天間飛行場の移設問題＝辺野古新基地建設』の議論が錯綜しているところがあり、論点は何かをよく整理する必要がある。根っこにある安全保障問題は日本がおかれている地政学的な状況や世界の中でのポジション、日米関係等の多面的な課題をどのように考えていくか、日本全体が取り組まねばならない問題でもある。基地問題はそれに伴って出てくる問題で、基地が存在することによって生ずる事件・事故、騒音など周辺住民の安全・健康・生活を侵害するものだけに、基地の整理・縮小が重要な課題となる。沖縄県ではこれまで米軍基地に起因する多くの事件・事故が繰り返されており、その殆どは沖縄県民にとって満足のいく解決をしていないだけに沖縄の多くの住民にとっての切実な問題である。にもかかわらず沖縄県は日米安全保障体制を理解する立場を明らかにしており、「沖縄は日米政府の方針に盾ついている」というイメージがあるとすればそれは改める必要がある。



普天間飛行場とその周辺

普天間飛行場は基地周辺に公共施設・学校・各種ビルや住宅が密集し今や世界一危険な飛行場と言われている。太平洋戦争末期に米軍が上陸する以前には多くの集落が存在し、約1万4千人の住民が住んでいたところを米軍が普天間飛行場建設のために宜野湾、神山、新城、中原の4つの集落を中心に広い範囲を強制接収して作った飛行場で、その後住民が周辺に戻ってきた結果として今日のような状態になったもので、事故、騒音問題等を解決するためには普天間基地をなくすということは自明の流れと言える。ただこの代替として新基地を作るということ、さらにその場所として辺野古が唯一の解決策とするところは別次元の話で、今の進め方は沖縄住民としては納得できないものがある。基地を新たに作るということは基地縮小を目指す立場からは承認し難いことである。また、辺野古沖の大浦湾には262種の絶滅危惧種を含む5800種以上の生物が確認されているだけに、辺野古沖にひとたび土砂が投入されれば計り知れない打撃を与えるので大浦湾・辺野古の自然環境保全の観点から容認しがたいものがある。これらの点を考慮すると同じ同胞として日本政府・本土住民はもっと沖縄住民の立場を理解しなければならない。

一方、米軍の立場に立てば海兵隊の地上部隊の足としての飛行場が絶対に必要だからその場所としてキャンプ・シュワブとの連携がとれる辺野古が戦術的に最もよいということかと思われる。しかしその前提としての海兵隊の戦略的位置づけを考えた時、専守防衛を基本とする日本にとって海兵隊に日本国土に駐留してもらうことが本当に必要であるのかはもっとよく吟味する必要がある。簡単に米国の言いなりになっているのではなく日米でよく協議すべきで、ここに日本外交の真摯な努力が求められる。

辺野古沖の埋め立て予定地は軟弱地盤があるこ

とが明らかになっており、辺野古新基地建設の事業費が沖縄県は防衛省の当初の計画の10倍を超えて2兆5500億円になることが試算されており、また基地が使えるようになるまでに13年はかかるとも指摘されている。これでは政府の言う「普天間基地早期返還」は実現出来ないわけで、基本的な見直しが必要になってきていることは確かである。



キャンプ・シュワブ・ゲートに立つ警備員

本年9月末の沖縄県知事選挙で辺野古新基地反対を訴える玉木デニー氏が勝利し、沖縄県民の意思が明確になってきた。これを受けて米紙ニューヨーク・タイムズは10月2日の紙面の社説で「何度も何度も、沖縄の民意は新しい基地を欲していないことを示している。日米は公平な解決策を探るべきだ」と主張している(2018.10.3朝日新聞)。米国でも土砂投入をめぐる抗議集会が行われており、ホワイトハウスの嘆願書サイトで辺野古移設工事を止めることを求める嘆願書に賛同する署名が署名開始1か月内で10万筆を越えている(2018.12.19朝日新聞)。それにもかかわらず日本政府は「辺野古移転は唯一の解」として、強引に辺野古新基地建設を進めようとしているのは、力づくで沖縄という1地方自治体を抑え込もうとする中央政府権力の傲慢さが感じられ許しがたいものがある。

基地移設はユクシ、新基地建設だ！（ユクシは沖縄の方言でウソの意）

循環研理事 山口民雄

まず、12月14日の土砂投入に強く抗議したい。もう、原状回復できない。これが知事選の直後のコメント「選挙結果を真摯に受け止める」「県民の想いに寄り添っていく」ことなのか、真逆の行為である。一方、過去11回、沖縄を訪問した天皇陛下は最後の誕生日の記者会見で「沖縄の人々が耐え続けた犠牲に心を寄せていくとの私どもの想いは、これからも変わることはありません」と万感の想いで述べられている。政府のコメントとは雲泥の差があり、コメントには何ら血が通っていないことを改めて確認した。

沖縄行きは今回で4回目。ベトナム戦争が激化している時、多くの戦闘機が沖縄から出撃しており占領下の沖縄の人々の気持ちを考える中で関心を持ったのが最初だ。その後「復帰」をしたが、在日米軍の75%を沖縄に押し付け多くの日本人が沖縄の痛みを共有することなく、沖縄の米軍基地は「日本国と国民を守る抑止力だ」とし、経済的繁栄をむさぼってきた。この状況は残念ながら変わっていない。

辺野古新基地は決して普天間基地の移設ではない。新たな機能（軍港や弾薬庫、燃料栈橋など）が加わり、1960年代に構想された新基地建設そのものである。今回のFW（フィールドワーク）で沖縄県庁の担当者から頂いたパンフレット「沖縄から伝えたい。米軍基地の話。」にも詳しく解説されている。こうした事実が明らかになっているにもかかわらず政府、多くのマスコミでは「移設」を強調する。強調すればするほど危険な基地建設を隠ぺいすることになる。

私の直近の訪問は2015年12月のピースボート

での寄港だ。訪問先は今回のFWとほぼ同じであった。異なるのは大浦湾とキャンプ・シュワブ、新基地建設予定海域を望む瀬高に天候の都合で登れなかったことだ。機会があれば全貌が良く分かるので訪問していただきたい。もう1点は、政府と沖縄県の話し合いで“休戦中”であり、テント村も閑散としていたことだ。2015年の時は、特に搬入などが予定されてはいなかったがそれなりの人が詰めており、決意表明のあとゲート周辺のデモを行った。

普天間基地の跡地利用の構想がこれまで発表もあり、また嘉数台の展望台にも展示されていたが（FW時には撤去されていた）、そう簡単ではないようだ。英国のジャーナリストのジョン・ミッチェルによれば、沖縄では基地内外で枯葉剤をはじめ危険な化学物質が使用、放置されてきたという。米軍が使用実態を隠ぺいしており、跡地利用まで何年かかるかわからない。しかし、直ちに基地撤去を求める。

今回のFWで新たな収穫の一つは県から頂いた「他国地位協定調査中間報告書」だ。米軍基地に国内法が適用されないまま米軍の裁量に委ねている現在、諸悪の根源は地位協定そのものだと考えており、県のこうした調査は極めて重要である。また、FWにはなかったが、糸満市のひめゆりの塔、平和祈念公園を訪問した。それぞれの資料館では「沖縄の人々が耐え続けてきた犠牲」を詳らかに伝えていた。

沖縄の人々の“非暴力、直接行動”を強く支持したい。玉城知事の言うとおりの“あきらめないことが勝利を勝ち取る”である。山梨の地で何ができるか、私の課題だ。

「沖縄ほろ酔い紀行」

循環研理事 及川陽子

羽田空港の建物の入り口が朝5時まで開かないことを知らなかった。羽田発6:30那覇行きの航空券を手配していた。到着後の予定を考えれば、前日に沖縄入りした方がよいのだが、生憎10日に予定が入っており、やむなく朝一番の飛行機ということになった。

YCAT発の一番バスに乗れば、出発に間に合うと踏み、YCATまでは家人に送ってもらうことにしていた。だが、羽田まで送ってくれるということになり、早めに家を出たら5時前に羽田空港に到着してしまった。ということで5時のオープン迄、車に待機する羽目となった。

前日もあまり寝ておらず、飛行機の中でも眠ることが出来ず、那覇に到着してしまった。那覇での行動内容については、他の参加者の方が詳しく書いて下さると思うので、私は少し感想を述べるにとどめることにする。

沖縄には以前、観光(久米島でシュノーケリングするため)で来たことはある。その時本島を少し見てまわった。しかし、お決まりの観光コースを案内に従ってまわっただけで、基地のことなど何も意識することはなかった。

実は今回のフィールドワークに参加するにあたって、ガイドブックを一冊購入したのだが、内容にも添付の地図にも「基地のきの字」も触れられていないことに驚いた。空港で手に入れた地図もしかりだ。

しかし、実際には那覇の街から、さほど遠くないところに普天間基地はある。そのフェンスの何処までも続くような長さ、嘉数高台展望台から見える普天間基地の広大な敷地、これが現実の沖縄だということが否応なしに意識させられた。

フィールドワークにて詠めり俳句二句

雨冷えやトーチカの残る島
秋憂ふ辺野古の海に基地迫る

さて、フィールドワーク終了後、那覇の街に3泊した。久しぶりの沖縄だ。少しのんびりと街をブラブラしたいと思っていた。勿論、ただ歩き回っていただけではない。

国際通りの居酒屋で泡盛を楽しみ、牧志公設市場で熱帯魚のような魚や、豚の顔がそのままの容で売られているのを面白がり、市場で刺身とオリオンビールを堪能し、今流行りの「千ベロ」(千円あればベロベロに酔える店)など徘徊したことは言うまでもない。

そんな一日、一人瀬長島という所を訪ねてみた。2015年にオープンした「ウミカジテラス」に行ってみたく思ったからだ。パンフレット等によれば、イタリアやギリシャの街並みを思わせる、白い建物が並び沖縄ならでの野菜や果物の地産メニューの店やジュエリーやクラフトショップなどが並ぶローケーションとのことだ。

但し、私がこの島を訪ねようとした目的は、そこが那覇空港の直ぐ近くで、飛行機の離発着が見渡せる場所だったからだ。

基地見学のおりは航空機やヘリの発着がなく、音を意識することがなかった。まあ、戦闘機やヘリとは違うが、旅客機の離発着の轟音を体感できるかも知れないと思ったのだ。

もっとも、それも言い訳に過ぎないかもしれない。

結局、リゾートホテルのカフェで青い海を見ながら、ひとりビールのグラスを片手に私はご満悦だったのだから。

沖縄フィールドワークに参加して

循環研理事 服部 充

平成30年の秋、循環研のフィールドワークとして沖縄県を訪問しました。辺野古や高江などを訪れ、基地問題の中心となっている場所を視察。そして沖縄県庁職員のレクチャーや、反対派住民のお話を聴く機会を得ることが出来ました。辺野古の海は美しいところだということと、ヤンバルの森の素晴らしさも実感することができました。

【フィールドワークにて詠んだ三句】

いと熱し 辺野古の海と 那覇祭り
 恐ろしや 秋空嚇す 鉄の鳥
 自由なり 基地を行き交う キリギリス

沖縄滞在四日目は、妻と一緒に宮古島を訪問しました。那覇からの日帰り旅行でした。島内はタクシーを1日貸切りで利用し、ゆったりとしたスケジュールで過ごすことができました。車窓からクイナが歩いているのを見つけたり、珍しそうな蝶たちの優雅に飛ぶ姿にとっても穏やかな気持ちにさせられました。そして、現在宮古島がリゾートホテルの建設ラッシュになっている理由も理解できました。それは、美しい海と、下地島空港があること、そして生活の不便さを解消するため完成された島と島をつなぐ長い橋にもその要因があるかもしれないということでした。3kmの滑走路をもつ下地島空港は、パイロット養成の訓練飛行場として使用されていたこともありましたが、2019年の新ターミナル完成とともに定期便が就航するようです。この空港の、着工までの経緯・着工以降の沿革はととても興味深いものがあります。生活の便利さと自然環境との調和はいつも難しい課題を提起するようです。

宮古島では、念願であった宮古上布の工房を訪ねることができました。人なつこい工房の先生に誘われて、妻は宮古上布の糸を積(う)む作業を2時間ほど根気よくやっていました。苧麻(ちょま)をしごいて繊維をとり、さらに爪で細く裂く。絹糸ほどの細さのものを繋げて行く作業です。一反の着物を織るためには、気の遠くなるような糸を作る作業があり、さらに、染色から織りにいたるまでの間にもいくつもの工程があります。想像を絶するほど困難で過酷な手仕事を長い時代に渡り継続して、素晴らしい上布を作って来ました。しかし、そのことがかえって仇となり、古き時代には悲惨な境遇を生むことにもなったようでした。

夕刻那覇に戻り、夕食のため街にでかけました。食事をした店の人とのなげない会話にあたたかみを感じました。ホテルに戻り、ラウンジに流れていたピアノの音に耳を傾けてソファに座ろうとしたら、妙齢の女性が1人座っていて、こちらへどうぞと声をかけられました。ほどなく、ピアノを弾いていた女性から、リクエストはありませんかと言われたので、私の好きな曲をお願いしました。ピアノソロのステージが終わると、その女性も我々のところに座り楽しく歓談しました。なぜか意気投合し妻を加えて4人で、少し離れたところにあるジャズのライブハウスを訪れ、楽しい時間を過ごすことができました。「本土の人に喜んでもらえて嬉しいです」と2人に言われ、余りのことに私はとまどってしまいました。なぜかとても心癒され、人の温もりを感じた沖縄でした。

沖縄フィールドワーク フォトレポート

↓参加メンバー



↑沖縄戦当時のトーチカ砲弾の跡が生々しい



↑嘉数高台展望台から見た普天間基地のオスプレイ



↑嘉手納基地の広大さに改めて驚く

基地
→道の駅から見た見た嘉手納



↑地元辺野古住民の金城武政さんにお話を聴く



↑辺野古ゲート前は雨の中、アルソックの警備員が並んでいた



↑高江ヘリパッド反対派の説明を聴く



←非暴力の座り込みガイドライン



↑高江のヘリパッドに通じるゲート前

環境俳句

この夏の暑さは想像を絶するものだった。連日連夜クーラーをつけたままの生活。外へ出ていく気も失せ、家の中で無為に過ごす日々。そんな中でも句作はする。俳句を詠むうえで重要な要素のひとつに**季節感**がある。ということで俳句のイロハ、その二として、今回は俳句の約束事の中の季節についてとりあげてみようと思う。

①俳句には季節がある。春夏秋冬、新年（旧暦での季節となり現代とはズレもある）

春・・・2月、3月、4月

夏・・・5月、6月、7月

秋・・・8月、9月、10月

冬・・・11月、12月

新年・・・1月

②季節により、それぞれ季語があり、季語にはいかのような分類がある

1) 時候

例として春、初春、立春、夏、初夏、秋分、冬至

2) 天文

例として春の日、朧、梅雨、南風、秋、月、北風

3) 地理

例として春の山、水温む、雪崩、青田、滝、稲田、冬景色

4) 人事

例として雛祭り、子供の日、七夕等の他、食べ物、飲み物等

5) 宗教

例として祭り（各地の祭り等）、桜桃忌等（有名人の忌）、

6) 動物

例として動物（鳥、魚、貝等の生き物も含む）

7) 植物

例として樹木、花（桜や梅等）

循環研理事 及川陽子

このように、季語を入れて俳句を詠む。

「**季寄せ**」（季語を集めて分類・整理したもの）を持っていなくても、ネットなどで「俳句 季語 春」と打てば、春の季語を調べることが簡単にできる。時間のある時に一度、挑戦してみたいはかがか。忘れていた季節感を思い出す事も出きるかも知れない。

冬号投句 お題「年末年始」

俳句の講評や添削は「寺門土果」先生にお願いしております。添削は句作の折に参考にして下さい。

北竜 4句

※COP24 ポーランド・カトヴィツェ会議ではパリ協定実施のルールブックづくりが行われました。

暖冬の 年に決めたい 脱炭素

評) 脱炭素を化石燃料とするなら→「脱CO2」

添削) 暖冬は絶好機なり脱石油

※年寄りの冷や水かもしれませんが、気持ちいい。

年忘れ のぼる坂道 息白く

添削) 息白し老いてなお行く登り坂



※身体の老化は進んでも平和と環境を守りたい。

歳を経て 変わる細胞 続く意思
添削) 歳々の身は枯るるとも意思朽ちず

※脳出血のため救急車で運ばれました。身体は最も身近な自然環境。壊してしまいました。

年越しや しびれる右手 撫で想う
添削) 去年今年右手のしびれ撫でる身は

牛閑 3句

ご馳走を 山ほど残して 聖夜すぎ
添削) 残飯の堆積無残エセ聖夜

酷暑すぎ 極寒来るかと 年の暮れ
添削) 極寒の予想酷暑に懲りぬ人
添削) 因果かな熱夏のあれば厳冬も

物事が ゆっくり動く 松の内
添削) 人も時も歩み平や松の内



爽竜 3句

年の瀬に 高く積まれた プラのゴミ
添削) 年の瀬の廃棄のプラの堆 (うずたか) し

寒暖に 戸惑いながら 冬桜
添削) 時ならぬ気温に惑ひ冬桜



被災地に 寒風吹きて 年の暮れ
添削) 被災地を無情の風や年の暮

私 (俳号 霧乃) も一句
民意無視 辺野古埋立 年暮
(みんないむし へのこうめたて としのくれ)



次回春号のお題は「春の季語を使って身近な環境について詠む」(エネルギーや生物多様性、ゴミ問題、自分の身近なことに向き合うなど)

ご応募お待ちしております。

春夏秋冬

以前は車か自転車で遠くに行くのが好きだったけれど、今はすっかりご近所でぶらぶら散策ばかりしている。でも近辺には大きな川があり、川に沿った雑木林があり、池もある。田舎暮らしではないが、それなりの自然、四季を感じ、一年を通して木、花、野草、山菜、そして、そこに集まる野鳥、水鳥、様々な昆虫類も観察できる。

今の時期、冬に咲く木の花の代表は蠟梅（ろうばい）だろう。黄色で蠟細工のような花が咲く。この黄色が冬の透明な青い空をバックにして、花の美しさを際立たせる。その微かな香りも上品だ。そこにモズが飛来し枝にとまる。その絵は絶好のシャッターチャンスではあるが、今だにそのチャンスに巡り合ったことはない。モズは「百舌鳥」と書く。この漢名は他の鳥の鳴き声をまねする習性に由来しているという。木の枝にとまり尾羽をゆっくりと回す姿が、なんとも言えず可愛い。

更に、川沿いをぶらぶら歩いて池に着く。冬はこの池で水鳥が多く観察できる。サギはオオサギ、コサギ、アオサギ、ゴイサギ等々が飛来する。カモはコガモ、ヒドリガモ、オナガ、ホシハジロ、キンクロ等々が群れて水面をあちこち移動する。水辺では時々カワセミが宝石のような姿を見せびらかす。木、花、鳥それぞれ個別の名前を知ると、その特徴や習性が分かり興味が倍加する。さすがに昆虫類の興味

は蝶やトンボぐらいで、クモやカマキリ、ゲジゲジなどは子供達に任せたい。

ともあれ、平成の時代は2019年4月30日で終了する。世界の中で日本の情勢がどのようになろうとも、人間社会が何かと騒がしくとも、わが近辺の四季は淡々と移り行く。新年は、そこに身を置いて、密かに世間の様子も観察することにしよう。

初夢は宙一面の四季絶景



*空に向かって go! go!

／写真：風月（M）

循環型社会研究会（Workers Club for Eco-harmonic Renewable Society）とは
循環型社会研究会は、10年来有志で環境問題現場でのフィールドワークを中心に活動してまいりましたが、2002年7月3日に特定非営利活動法人の法人格を取得しました。

「次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社会のあり方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取組みの研究、支援、実践およびそのための交流を行う」ことを目的として活動しています。

循環研通信は年に4回発行しています。広く原稿を募集しています。「環境俳句」にも奮ってご応募ください。次回の締切は2019年3月末です。

循環研通信/JUNKAN No.52 2019年1月発行

発行人:久米谷 弘光（循環研代表） 編集責任者:榎屋 治紀（循環研理事）

特定非営利活動法人循環型社会研究会

104-0031 東京都中央区京橋3-3-14 京橋AKビル6F

Tel: 03-6262-5946 Fax: 03-5542-1062

E-Mail: junkan@nord-ise.com HP: <http://junkanken.com/>